

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24617019

研究課題名(和文) 南洋における日本人社会の形成と変遷 在日外国人との共生の一助として

研究課題名(英文) Formation and Change of Japanese Communities in Sotuth East Asia for the coexistence with foreign residents in Japan

研究代表者

青木 澄夫 (AOKI, Sumio)

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：30424922

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：近年、日本企業の東南アジア諸国に対する関心が高まっている。今までの大企業に加え、中小企業や個人によるビジネスの展開が著しい。しかし、100年以上も前に日本人が東南アジアで経済活動を行っていた事実はあまり知られてこなかった。

本研究は、明治以降東南アジアに進出した日本人の動静と彼らのよりどころになった日本人会の形成とその発展に関し、インドネシアのメダンとシンガポールについて明らかにした。また、ほとんど痕跡を残さなかった日本人商人の中で、大量の写真絵葉書を制作した日本人写真師と日本商店の存在を明らかにし、市民レベルの日本・東南アジアの交流史の一側面を詳らかにした。

研究成果の概要(英文)：In recent years, there has been a growing interest in the Southeast Asian countries of Japanese companies. In addition to the large companies, expansion of business by small and medium-sized companies and individuals is significant. However, the fact that the Japanese had done the economic activity in Southeast Asia more than 100 years ago has not been well known.

This study focused on formation and its development of Japanese Associations which became their cornerstone of Japanese who moved into Southeast Asia after the Meiji era. Most in the Japanese merchant who did not leave a trace, however there were Japanese photographers and Japanese shops that had produced a large amount of photo postcards. This is one aspect of Japan and Southeast Asia of the alternating history of citizen level.

研究分野：日本東南アジア交流史

キーワード：日本東南アジア交流 日本人の海外進出 日本人会 からゆきさん 日本人写真師 日本商店 写真絵葉書 南洋

1. 研究開始当初の背景

日本国内においては、在日外国人との共生が課題となっている。翻ってまだ貧困国だった時代の日本人の海外生活はどのようなものだったのか。

明治開国以来、日本人は海外に職を求めて渡航した。初期の東南アジア地域(南洋)においては、「からゆきさん」や小・無資本の日本人が進出し、政府の庇護もない状況の中、互惠精神を以て、慈善会、共済会、厚德会などの互助会組織を設立した。

その後、1900年にオランダ領東インドのメダンで日本人会(成立会)が設立されたのを皮切りに、新たに商社や企業などから派遣された人々とともに、各地で日本人会が結成された。しかし、小資本の古参者と会社派遣の人々による新旧両者の思惑は必ずしも一致せず、その形成には困難を伴う地域もあり、インドのボンベイの日本人社会のようにすべての日本人を包括する日本人会が形成できなかった都市もあった。

日本人会は、原則日本国籍を有し所定の会費を払えばだれでも入会できることが原則だった。また、現地政府に集会法の除外団体等の認定を受けることも必要だったが、この点についての詳細はわからないことが多い。

日本人会は、在留邦人の福祉や社会的地位の向上を図るとともに、邦人の重要案件であった日本人墓地の管理・維持に力を注ぎ、その後日本人小学校等の経営に力を入れた。

従来、矢野暢らによる「日本の南方関与」に関する研究が進められてきたが、その研究は1930年以降に集中し、1910年前後の日本人社会については、タイのバンコクやフィリピンのマニラなどを除き、不明なことが多かった。

また、日本人社会の大半を構成する一般日本人の経済活動についても、その詳細は不詳であった。

2. 研究の目的

本研究は、1910年前後までにおける東南アジア諸国の日本人社会の変遷を解析し、今後の国内における外国人社会との共生を考えるための一助にするものである。

東南アジアの日本人会は、上述のメダンに続き、オランダ領東インド(以下インドネシア)では1905年にドボ、1907年にメナドで結成された。主要都市では、暹羅(タイ・バンコク)とバタビア(ジャカルタ)が1913年に、シンガポールでは1915年に日本人会が設立されている。

日露戦争(1904~5年)に勝利し、日本人の国際的地位が向上したこともあり、東南アジア地域の在外公館も、積極的に日本人会の設立を支援した。少人数で管轄する在外公館にとって、各地に散在する日本人の状況を把握する意味合いもあった。

その結果、マレー半島を中心に1910年前後には、多数の日本人会が結成された。

しかしながら、日本人会は基本的には民間団体であり、その記録や刊行物は現地で作成され、日本にその情報が流入することは少なかった。また、第二次世界大戦の勃発とともに、ほとんどの東南アジア在住の日本人は帰国を余儀なくされたため、その記録類は散逸してしまった。このような史資料不足のため、従来各地の日本人会の形成過程について知ることは困難だった。

本研究では、東南アジアで在留邦人が最も多数に在ったシンガポールと、最も早く日本人会を成立させたインドネシアのメダンを例に、従来使用されてこなかった、現地で刊行された邦文文献・資料等を多用しながら、日本人会成立の過程を分析することにした。

また、東南アジア地域で、小資本による経済活動を行っていた日本人についての状況を調査分析することにした。

3. 研究の方法

(1) 邦文文献の収集

東南アジア関連の邦文文献目録は、現在までに数種類刊行されているが、必ずしも整備されているとは言い難い。特に、明治・大正期に東南アジア諸国で刊行された邦文文献については、所蔵する公的図書館が存在しない等の理由から、主要な資料の記載漏れが見られる。

報告者は、かつて日本で刊行されたアフリカ関連書籍の収集を試み、「明治期日本におけるサブサハラ・アフリカへの関心(書籍目録) TICAD IV を前にしてアフリカとの関係を振り返る」(『アフリカ研究』Vol. 2008(2008) No. 72 P 61-66)として発表した経験から、今回も東南アジア(南洋)関連の史資料の収集に努めた。

1909年に、シンガポールでは邦字新聞が発行され、その後各地で邦文雑誌も発刊されている。しかし、海外で発行されたことに加え、発行部数はわずかだったため、これらを所蔵する公的図書館は少なく、しかも原本を入手することは現実的には困難を伴う。

また、現地の邦文新聞・雑誌社は現地事情紹介のために資料・書籍を発行し、日本人会もシンガポールのように会員の多いところでは、会員向けの情報誌を刊行している。

報告者は、これら上記の主要な南洋関連資料のいくつかを収集済みであったが、継続して史資料の収集を実施した。

あわせて、明治・大正期に刊行された膨大な量の関係雑誌や、外交史料館史料等の調査も行ったが、その調査は十分なものとは言えなかった。

(2) 海外調査

本研究では、資料収集と分析に加え、海外現地調査に重点を置き、インドネシア、タイ、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、シンガポール、ベトナムの主要都市で調査を行った。文献の収集は、各地の公文書館、図書館、

博物館、大学、研究機関、古書店、古物商で実施した。一方、南洋統治の拠点であった台湾では、台湾大学等で日本国内では入手できない文献の調査収集を行った。

また、多くの資料が欧米諸国に流出しているため、インターネットオークションや海外の古書店・古物商等からも資料を入手した。

しかし、現地で刊行された欧文新聞や雑誌、また『爪哇日報』のようにインドネシアの国立図書館に収蔵されている邦字新聞については、時間の制約上ほとんど閲覧できなかった。

(3) フィールド・ワーク

一方、邦人が多数在留していた7か国、20余の都市を訪問し、日本人会等で情報の収集に努めるとともに、所在地の判明している邦商店舗、日本人街、日本人墓地等で現地調査を行った。

また、後述する写真絵葉書については、撮影場所が判明している現場を訪問調査し、写真と現状を比較分析した。

(4) 日本人が残した写真絵葉書に見る 100 年前の東南アジア

本研究で対象にする在留邦人は、明治大正期に南洋（東南アジア）で在留した一般市民の経済活動だが、彼らの足跡を辿ることは困難を伴った。

その一方、文献・資料収集の過程で、東南アジア在住の日本人が、1900年代初頭から1930年代にかけて、大量の写真絵葉書を製作・販売している事実が判明した。

写真絵葉書は、日本国内においても日露戦争の戦況報告などのために爆発的なブームを1900年代半ばに迎えているが、ほぼ同時期に、東南アジア在住の日本人が絵葉書の製作・販売に携わっていたのである。

販売された日本人の手による絵葉書に付された説明（撮影対象、製作・販売者名）はほとんどが英語、フランス語、オランダ語等、当時の宗主国の言語で書かれたことから、これらの絵葉書の購入者のほとんどは、欧米人だったことが判明する。

そのため、これら絵葉書は、販売国の東南アジア諸国ですら残存するものは少なく、日本に流入する量も少なかったことから、従来その存在が知られることはなかった。

よって、研究の後半は、東南アジア地域で、邦人写真師と日本商店が作成した写真絵葉書の収集に努め、彼らの存在と彼らの残した足跡について調査を行った。

4. 研究成果

(1) 日本人会の形成

邦人日本人社会の要となった日本人会については、東南アジアで最も早く日本人会を結成したインドネシアのメダンと、東南アジア最大規模の日本人社会を有したシンガポールにおける、その形成過程をとりまとめ2

本の論文として発表した。

オランダ領東インド（蘭印）時代のスマトラ島メダンにおける1910年代までの日本人社会の形成と変遷

現在インドネシアのメダンの在留邦人数は100名に満たないが、遅くとも1880年代には日本人が定住し、その大半は周辺地域に散在するゴムや椰子のプランテーションに勤務する欧米人の愛人だった女性だった。詳細な数字は不明だが、数百人から千人近い女性がいたとも言われている。

彼女らに寄生する男たちの中から、商店を経営するものも現われ、1900年には東南アジアで最初の日本人会（成立会）を結成した。会の名称に「成立」を用いたのは、それまでの互助会（日曜会）では議論がまとまらず、それを踏まえた反省からだったという。

その後1904年に、成立会はスマトラ日本人協会と改称して周辺地域の日本人をも抱合した。1910年代後半には、東南アジア諸国の中で最もまとまりのある日本人会と賞されている。

シンガポールやバタビア（ジャカルタ）などの大都市と異なり、1910年代半ばまで、日本の企業が存在しなかったメダンでは、海外に生きる在留邦人の共生の場として、特異的な日本人会だったといえる。

同会には、創立35周年を記念して作成された『スマトラ東海岸州地方在留民一覧』があり、本論文も同書を基に検討を加えた。

明治末期のシンガポールの日本人社会 幻の日本人会成立と日本語新聞

東西交通の要所であるシンガポールは、日本人の集散地でもあり、その地に在住する「からゆきさん」の存在は、早くから国内外に知られていた。日本人墓地の取得も1989年に行われ、互助団体慈善会（後に共済会）も同じところに結成されている。

日露戦争後には、出稼ぎ来訪者の人数も増え、また「正業」の商店等も増加した。1909年には福田天心により「南洋新報」、また伊藤友治郎により「新（星）嘉坡日報」と、二つの邦字新聞も誕生した。

1909年、在留邦人は古参医の中野光三を中心に、日本人青年会を結成した。しかし、同年にゴム園経営のために渡南した、フランス文学者の長田秋濤らは、日本人会の結成を主張して対立した。青年会派は「南洋新報」で、日本人会結成派は「新嘉坡日報」でそれぞれ論陣をはり、事態は泥沼化した。

1910年5月8日、青年会から日本人会への移行が決定し、ここに日本人会が設立され、長田が会長に就任した。しかし、日本人会が現地政府から集会法の除外対象団体に認定されなかったこと等から事態は紛糾し、日本人会派と青年会派が併存することになった。日本人会成立は実質的に幻となった。

日本領事や三井物産などを巻き込んだ、守

旧派と革新派の対立だったが、領事や三井物産は守旧派（青年会派）に組した。

本論の依拠した資料は、辻森民三が1930年代にシンガポールで刊行した雑誌『南洋時代』に掲載された伊藤浪韻の連載「新聞紙」などである。

なお、その後、1915年に新たに結成された日本人会については、現在執筆中である。

(2)日本人が残した写真絵葉書に見る100年前の東南アジア

近年経済成長が著しい東南アジア諸国では、古写真や古絵葉書への関心が高まり、公文書館や図書館、博物館がその入手に努めている。その中には日本人が関与した絵葉書や写真も相当数含まれているが、写真の撮影者や絵葉書の発行人について言及されることは少ない。

外務省が1910年におこなった在留邦人調査によれば、シンガポール、マレーシアに男の日本人写真師が42名、フィリピンに18名、タイに18名が活動していた。当初は「出写」と称した出前撮影や、村々を巡回営業していた写真師も多かった。1895年に、タイのバンコクで磯長海洲が写真館を開設し、それ以降各地に日本人写真館が開業した。その中には、19世紀末から世界的に流行した写真絵葉書の製作に乗り出す写真館や日本商店があった。

本研究に際して、私費で収集した東南アジア関連写真絵葉書は、現地で撮影・製作したもの、現地で撮影し日本や外国で印刷したもの、日本の博覧会等の会場で販売した国内向けものなどで、2000枚を超える。

絵葉書には、製作者・撮影者の名称が付されないものや、made in Japanとだけ書かれた日本製も多数存在する。

現在報告者が所有し、製作に日本人が関与した（絵葉書に日本人名、写真館名等が記されているもの）写真絵葉書800余枚の中で、最も古い絵葉書と判明しているものは、1904年の消印があるビルマ・ラングーン（現在のミャンマーのヤンゴン）の藤井商会（店主藤井松太郎、以下同様）が製作したものだ。

1900年代半ばからは、シンガポールの東郷社（満井善吉・利政）とインドネシア・メダンのK. Y. ASAHI（詳細不明）、旭写真館（槇田益雄）、藤崎写真館（藤崎市郎太）も絵葉書製作にのりだした。

1910年代には、ベトナムのハノイで渡辺写真館（渡辺七郎）、マレーシアのクアラ・ Lumpurで中島写真館（中島茂四郎）が、ペナンの日光写真館（岡庭喜三治）、マラッカの筒井商店（筒井信吉）と石井写真館（石井長吉）、インドネシア・パダンの大谷洋行（大谷喜一）、バタビア（現在のジャカルタ）の島根商会（花岡恭）、スマランの南洋商会（堤林数衛）、スラバヤの古川写真館（古川伍平）、フィリピンのマニラの山本写真館（Sun Studio、山本鶴次郎）などの写真館や商店が

手を染めている。

1920年代以降では、タイ（シャム）・バンコクの江畑洋行（江畑彌吉）やRising Sun Studio（波多野章三）、ミャンマー・ヤンゴン（ビルマ・ラングーン）の万歳商会（植村喜市）と山田洋行（山田秀蔵）、フィリピン・バギオのMountain Studio（永富三二）とJapanese Bazar（早川豊平）、タイ（シャム）・チェンマイの田中写真館（田中盛之助）などが精力的に絵葉書を作成した。

オランダ領東インドだったインドネシアは、最も日本人写真師が活動した地域であり、サバンの上本商店（上本小太郎）と市川写真館（市川文次郎）、プラスタギの浅田写真館（遠藤彌光）と旭写真館（磯村勝）、サバンの上本商店（上本小太郎）と市川写真館（市川文次郎）、バンドンの川合商会（詳細不明）、トサリのTosari Studio（佐竹捨三郎）、バリ・デンパサールの相模写真館（詳細不詳）など30余にわたる商店や写真館が写真絵葉書の製作・販売に携わった。

上記で述べた商店や写真館の名前は、従来の日本・東南アジア交流史研究の中で、ほとんど取り上げられてこなかった。しかし、マレーシア・ペナンの日光写真館、クアラ・Lumpurの中島写真館、インドネシア・プラスタギの浅田写真館などが作成した写真絵葉書は、歴史資料として拡大され、現地の博物館等で展示されている。

また、マレーシア・マラッカの石井写真館作成の絵葉書のように、現在も複製されて販売されているケースもある。中島、石井、日光各写真館などは、シンガポール・マレーシアの写真研究史の中で、その名前が取り上げられているほど著名な店であり、タイ・バンコクの江畑洋行やインドネシア・トサリの佐竹は、それぞれ現地で豪華な写真集を発行している。

カメラや電話がまだ普及していない時代、絵葉書は簡便な通信手段、手軽な土産として重宝だった。そのため、写真絵葉書は、各地の写真館や商店が競って製作・販売している。報告者が所蔵する800余枚の写真絵葉書は、上記を含め35の都市、70店以上で製作・販売され、その範囲はラオス、カンボジア、ブルネイ、東チモールを除いた、広範な東南アジア地域にわたっていた。

前述したように絵葉書に付された説明（撮影対象、撮影・製作・販売者名）などが欧米語で書かれていることから、購入者のほとんどは、欧米人だったと推測される。

そのため、報告者が収集した写真絵葉書の調達先は、その9割が欧米諸国で、日本国内での入手は1割程度である。

消耗品でもある絵葉書は、販売国の東南アジア諸国ですら残存するものは少なく、日本でもその存在が知られることは、ほとんどなかった。

写真師は仕事柄、現地政庁にスパイと疑われることが多く、事実日本政府や軍に協力を

強いられた人々もいる。そのためか、1930年以降には、日本人が製作したにもかかわらず、発行元を明記しない写真絵葉書も多い。

しかし、日本と同様に、風俗や文化、自然や建造物など、東南アジア諸国でもすでに失われたものは多い。また、日本人の東南アジアへの関与についても、一般日本市民の活動を物語る史資料は極めて少ない。

歴史の一コマを画像に残した、「無名」の日本人たちの足跡は大きく、日本と東南アジア諸国との交流史の観点からも評価に値する。

絵葉書作成に関与した写真館、商店についての裏付け調査は、外務省史料や従来利用されてこなかった『南洋画報』など1910年前後以降に刊行された文献を活用した。

ちなみに欧米諸国では、写真絵葉書はコレクションとともに投資の対象とも考えられていて、希少なものは1枚300ドルを超えるものも少なくない。

(3)研究成果の公表

「日本人が残した写真絵葉書に見る100年前の東南アジア 付アフリカ」展の企画・開催

本研究の成果公表として、2015年2月6日から27日まで、中部大学民族資料博物館で、収集した写真絵葉書と歴史的背景の説明を付した展示会を開催した。

展示は、主要な写真館・商店が作成した写真絵葉書を拡大複写して56枚のパネルを作成して行った。また、報告者の所有するシンガポールで発刊された「南洋日日新聞」や「100年前の東南アジアを知る書籍」と題して当時の写真集やガイドブック、日本写真館で撮影された現地在住日本女性の写真などを展示した。パネルにはベトナム、シンガポール、マレーシアで販売された現地の日本女性をモデルにした絵葉書も「絵葉書の中の日本女性」として紹介した。

また、1900年代初頭に、アフリカで絵葉書を製作していた二人の日本人写真師（セシエルの大橋申廣とタンザニア・タンガのK. Tagawa 田川）についても紹介した。

本展示会に当たり、パネル56枚すべてを収録したカタログを200部製作し、研究機関、研究者に配布した。

日本人が残した写真絵葉書に見る100年前の東南アジア シンポジウム「東南アジアにおける日本人社会の形成と発展 在日外国人との共生のために」の企画・開催

2015年2月6日、中部大学30号館の講義室で本研究の成果公表として、国内外からの研究者を招へいして、下記シンポジウムを企画・開催した。

* 閉会の辞：中部大学国際関係学部長 中部大学民族資料博物館長 教授 和崎春日

* 講演：日本人が残した写真絵葉書に見る100年前の東南アジア 中部大学国際関係学

部国際関係学科 大学院国際人間学研究所 教授 青木澄夫

* 講演：日本が気づかせてくれた私のアイデンティティ インドネシア共和国パジャジャラン大学人文学部日本語学科非常勤講師 Ms. Risma Rismelati

* 講演：戦後フィリピン日系人の日本における「共生」 日系3・4世の日本への帰還現象を事例として 上智大学外国語学部英語学科 准教授 飯島真里子

* 講演：タイにおける日本人社会の形成と変遷 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 教授 村嶋英治

* 閉会の辞：中部大学大学院国際人間学研究所長 教授 林上

聴講者は約80名だった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

青木澄夫 明治末期のシンガポールの日本人社会 幻の日本人会成立と日本語新聞、『貿易風 No.9』中部大学国際関係学部、査読無 2014年4月 129-151

青木澄夫 オランダ領東インド(蘭印)時代のスマトラ島メダンにおける1910年代までの日本人社会の形成と変遷、『貿易風 No.8』中部大学国際関係学部 査読無 2013年4月 125-145

〔学会発表〕(計 3件)

青木澄夫 東南アジア地域に見る日本人会の成立 東南アジア学会第92回研究大会(立教大学 東京) 2014年12月20日

青木澄夫 アフリカの日本人写真師 大橋申廣とK.田川(パネル発表) 日本アフリカ学会第51回学術大会(京都大学 京都) 2014年5月23, 24日

青木澄夫 東南アジアで販売された絵葉書に見る日本人写真師の「まなざし」 第90回東南アジア学会研究大会(東京外国語大学 東京) 2013年12月7日

〔図書〕(計 1件)

「日本人が残した写真絵葉書に見る100年前の東南アジア 付アフリカ」展カタログ 中部大学民族資料博物館(愛知) 2015年2月 56

〔その他〕

ホームページ等

「日本人が残した写真絵葉書に見る100年前の東南アジア 付アフリカ」展を企画・開催、中部大学民族資料博物館、2015年2月6日~27日

日本人が残した写真絵葉書に見る 100 年前の東南アジア シンポジウム「東南アジアにおける日本人社会の形成と発展 在日外国人との共生のために」を企画・主催，中部大学，2015 年 2 月 6 日

絵はがきに見る邦人の足跡 下 ジャかるた新聞 2014 年 3 月 8 日

絵はがきに見る邦人の歴史 上 ジャかるた新聞 2014 年 3 月 1 日

明治の京都人セーシェル史に足跡 京都新聞 2014 年 2 月 21 日

写真絵葉書に見る日本と東南アジア 中日新聞 2013 年 11 月 1 日

世界遺産の街を撮した岡庭喜三治と日光写真館 ペナン日本人会会報 『かわんばる』 2013 年 11 月号

バタビア日本人会創立 100 年 在留邦人の足跡たどる ジャかるた新聞 2013 年 10 月 14 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木澄夫 (AOKI, Sumio)

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：30424922